

東京大学大学院人文社会系研究科
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣
帰国報告

最終報告提出日

2011年9月30日

派遣先の基本情報

氏名 太田峰夫

所属先 美学芸術学研究室助教

派遣形態 PD・助教

研究課題名

19世紀末ハンガリーにおける「国民楽器」ツィンバロンの受容状況に関する資料調査

Forráskutatás a cimbalomnak, mint a “nemzeti hangszer” -nek a századfordulói magyarországi befogadástörténetéről

派遣先での活動

(1) 派遣先の基本情報

ハンガリー科学アカデミー音楽学研究所

(2) 派遣期間

7月14日から7月31日まで、および8月10日から9月20日まで

主な研究成果

(1) 当初の計画の概要

本プロジェクトのねらいは、19世紀後半から世紀の変わり目にかけて、二重君主国体制下のハンガリーにおいてどのような階級のどのような人々が「国民楽器」ツィンバロンを学ぼうとしたかを調べ、当時のハンガリーの文化ナショナリズムの実状を明らかにしようというものである。

申請者はこれまでの調査で、王立音楽院（現フランツ・リスト音楽院）ツィン

バロン科（1897年創立）に1897年から1948年までに在籍した学生
の出身地や宗教などを調べたが、今回はハンガリー史、とりわけ社会史関連の
資料（たとえば各都市の人口の推移や階層・宗教・民族集団の構成についてな
ど）を調べることで、この問題の歴史学的な位置づけを明確なものにしたいと
考え、本プロジェクトを遂行した。日本ではアクセスしにくい歴史学関連の二
次資料（19世紀後半から20世紀初頭のハンガリーにおけるネイション意識
の高揚や市民階級の文化をめぐる研究等）を渉猟するほか、専門の近い研究者
に相談することも視野に入れた。

（2） 実際に達成された成果

本プロジェクトはまず、音楽学研究所バルトーク・アーカイヴ所長のヴィカー
リウス・ラースロー氏に計画の相談するところから始めた。各機関についての
現在の状況を教示してもらったほか、リスト音楽院資料室への紹介の労もとっ
てもらった。

音楽院資料室の全面的な協力により、王立音楽院（現リスト音楽院）の学生原
簿をゆっくり調査できたのは、今回の滞在での最大の成果だったと言える（写
真）。ツィンバロン学科の学生達についてさらに詳細に調べたほか、1898年
度、1913年度、1928年度に音楽院に在籍した全学生についても、おの
おのがどのような社会的な階層に出自を持つのか、細かく調べることができた。



【リスト音楽院資料室にて。手にしているのは学生原簿】

このほか、ブダペストではリスト音楽院と科学アカデミー音楽学研究所、ブダペスト市立サボー・エルヴィン図書館、セーチャーニ国立図書館で参考資料の閲覧や資料収集を行った。とりわけ国立図書館において、世紀の変わり目の「ジプシー音楽家」向け音楽雑誌や、19世紀末の女性雑誌など、ツィンバロンや「ジプシー音楽」をめぐる当時の状況を知る上で貴重な参考資料を閲覧できたこと、さらには資料の一部をコピーできたことは、非常に幸運だったと考えている。ブダペスト以外では、ケチュケメート市のコダーイ研究所にも出向き、1920年代以前の同市の音楽生活について調べた。

科学アカデミー歴史学研究所も訪れた。歴史学を専門とする研究所の図書館で関連文献（社会史を専門とする学術雑誌等）を閲覧できたのは大きな収穫だった。残念ながら派遣期間がちょうど夏休みと重なっていたため、近い領域の歴史家に自分の研究のことで相談する機会はなかったが、ハンガリーの歴史研究の一大中心地である同研究所の様子にふれられたのは、今後の研究にとって非常に有意義だったと考えている。

（3） 今後の研究展望

今回の調査をもとに、10月9日には東欧史研究会にて、女性の間でのツィンバロン受容について学会発表をする。論文の投稿もこれとほぼ同時に行いたいと考えている。学生原簿については、今回の調査結果をもととする発表を来年の7月——無事審査を通れば——国際音楽学会ローマ大会で発表する予定である。ただしこれについては、国内でも何らかのかたちで話題を提供できたらと考えている。今後もリスト音楽院資料室との関係を保ちつつ、音楽学・歴史学双方のフィールドで新しい成果を発表できるよう、努力していきたい。